

コブハクチョウ Q&A

作成：我孫子市鳥の博物館・コブハクチョウ標識調査グループ

コブハクチョウ基礎情報 —コブハクチョウの生物学編—

Q. コブハクチョウってどんな鳥？

A. カモ目カモ科の大型の水鳥で、全身白色の羽衣をしています。成鳥の嘴はオレンジ色で、上嘴の付け根の皮膚がふくらんでこぶ状になっています。

Q. 他のハクチョウとはどう違うの？

A. 日本国内に普通にみられるハクチョウには、オオハクチョウとコハクチョウの 2 種がいます。いずれもロシアなどで繁殖し、冬に日本に飛来する渡り鳥です。この 2 種の成鳥の嘴は、ともに黄色と黒の 2 色に分かれており、嘴の付け根にこぶ状の突起はありません。

Q. コブハクチョウはどんな環境にすんでいるの？

A. 池や沼、河川などの広い水辺の環境を好み、餌場としては水田や畑も好みます。

Q. コブハクチョウの大きさはどのくらい？

A. 日本で見られる鳥の中では最も大きいものの一つです。全長（鳥を仰向けに寝かせた時の嘴から尾の先端までの長さ）は 1.4-1.6m くらい、翼開長（翼を広げた時の両翼端の間の長さ）は 2.0-2.4m くらいです。雄のほうが雌よりも少し大きく、体重は雄で平均 11.0 kg、雌で平均 8.9 kg くらいです。

Q. コブハクチョウは日本の鳥じゃないの？

A. 日本国内の野生個体とされる記録は、1933 年 11 月に伊豆諸島の八丈島で捕獲された標本の記録のみです。関東地方に定着している個体群をはじめ、国内で現在みられる個体群は、意図的に放鳥された個体に由来すると考えられています。

Q. コブハクチョウのもともとの分布はどこなの？

A. もともとは、ユーラシア大陸に広く分布している鳥です。分布の中心はヨーロッパの中緯度地域で、中央アジアと東アジアにもいくつかの繁殖地域が知られています。東側の繁殖地は中国北東部やロシアの沿海地方に位置しています。

Q. 手賀沼には何羽くらいのコブハクチョウがいるの？

A. 手賀沼の中の個体数は初確認以降、年々増加し、2017年1月にこれまでで最大の83羽を記録しました。下流側の印西市下手賀川で市民による給餌が行われていることから、2020年秋ごろからそちらのほうに個体数が集中し、手賀沼内での個体数は減少しています。

手賀沼周辺のコブハクチョウは越冬期に多く、繁殖期に少なくなる傾向にあります。2022年1月には手賀沼内で18羽、下手賀川で137羽が確認されています。2022年7月には手賀沼内で15羽、下手賀川で84羽が確認されています。周辺の調査対象外の地域に何羽いるのかは正確に把握できていないため、粗い推定になりますが、越冬期には150~200羽、繁殖期には100~150羽ほどが手賀沼とその周辺地域に生息していると考えられます。

Q. コブハクチョウは渡りをするの？

A. もとものの生息地では、渡りをする個体群と、一年中同じ場所に定着する個体群の両方が知られています。日本国内に導入された個体群のうち、北海道のものは冬になると関東地方に渡りをするのが標識調査によって明らかになっています。関東地方の個体群は一年中同じ場所にいるものもいるようですが、実際にどのような移動をするのかはまだよくわかっていません。

Q. コブハクチョウは何を食べるの？

A. 主に植物質を好み、植物の葉・種子・根などを食べます。昆虫や巻貝などの動物質を食べることもあります。体が大きいため採食する餌の量も多く、1日に1.8-3.6kgの植物を食べると試算もあります。

Q. コブハクチョウはどんなふうに繁殖するの？

A. 一夫一妻で1年に1回だけ繁殖します。繁殖期は手賀沼では2月から7月ごろで、この時期にはなわばりを作り、他の個体や大型の鳥、他の動物が入ってくると追い払います。

Q. コブハクチョウはどこに巣をつくるの？

A. 水辺の草地の中に草を積み上げて、雌雄で協力して半径1-2mほどの巣を作ります。しばしば用水路の脇などに、より少ない巣材で巣を作ることもあります。

Q. コブハクチョウの産む卵の数はどのくらい？

A. 一度に産む卵の数はふつう5-8個で、雌は最後の卵を産んでから抱卵を始めます。ヒナが孵化するまでの期間は平均36日です。

Q. ヒナの色が2種類あるのはどうして？

A. 灰色っぽいヒナと、白いヒナの2タイプが見られます。灰色っぽいヒナは原産地の野生でもふつうにみられるタイプ（普通型）で、白っぽいヒナは野生では頻度の低いポーリッシュ型と呼ばれるタイプです。おとなになった時の脚の色にも違いがあり、前者は黒く、後者は汚れたピンク色です。手賀沼では両方のタイプが見られますが、ポーリッシュ型の割合が高いようです。

Q. どのくらいでおとなと同じ大きさになるの？

A. 生まれた年の冬にはほぼ成鳥と同じ大きさになります。繁殖を開始するのは雄でふつう4年目、雌でふつう3年目からといわれています。

Q. おとなとこどもの羽の色はどちらがうの？

A. 生まれてから1年くらいは、嘴の色がおとなよりも淡くピンク色みがあることで見分けられます。普通型のこどもは生まれた翌年まで灰色っぽい羽が残りますが、ポーリッシュ型のこどもは白っぽいので、一度羽が生えそろうと、羽の色で見分けることは難しくなります。

Q. コブハクチョウの羽はいつ生え換わるの？

A. 1年に1回、繁殖期の中ごろから終わりにかけて（手賀沼では6月から8月ごろ）、すべての羽毛が生え換わります。この時、飛ぶために必要な初列風切羽が一斉に抜け落ちるため、1~2か月ほど飛べなくなります。

Q. コブハクチョウの寿命はどのくらい？

A. 鳥類の中でも比較的長寿命なほうであると考えられます。ヨーロッパでの標識調査で確かめられた野外での最長の生存期間の記録は、28年10か月以上です。国内の標識調査でも、18年11か月以上生きた例が記録されています。ヨーロッパでの調査では、成鳥になってからの1年間の死亡率は20-30%ほどであることがわかっています。

Q. 手賀沼のコブハクチョウはどこからきたの？

A. 手賀沼では、1973年に初めて記録され、繁殖が初めて確認されたのは1990年です。これらの個体は直接手賀沼に放鳥されたものではなく、どこから来たのかははっきりわかっていません。当時は牛久沼など国内の他地域に定着した／放し飼いされている個体がいたようですので、そうした地域から渡来した可能性が高いと思われます。なお、過去に特定の自治体や団体が手賀沼に放鳥したという記録は残っていません。

侵略的外来種としてのコブハクチョウ ー人間との関係編ー

Q. 外来種って何？

A. 本来の移動能力を超えて、人間の活動によって本来の分布域の外に持ち込まれた生物を外来種（外来生物）といいます。たとえば、アメリカから日本に持ち込まれたアメリカザリガニ、ヨーロッパから日本に持ち込まれたオオイヌノフグリ、琵琶湖から関東地方に持ち込まれたゲンゴロウブナなどはすべて、持ち込まれた先では外来種となります。コブハクチョウもヨーロッパから日本国内に持ち込まれた外来種です。

Q. 侵略的外来種って何？

A. 外来種のうち、人の生活、農林水産業、在来の生物や生態系などに悪影響を及ぼすものを「侵略的外来種」といいます。これらの侵略的外来種は、「我が国の生態系等に被害を及ぼすおそれのある外来種リスト（生態系被害防止外来種リスト）」に取りまとめられています。また、特に規制を強化する必要がある国外からの外来種については、国の定める「特定外来生物による生態系等に係る被害の防止に関する法律（外来生物法）」で「特定外来生物」に指定されています。コブハクチョウも、「生態系被害防止外来種リスト」に「その他の総合対策外来種」として掲載されています。これらの侵略的外来種は、社会全体で個体数の増加や分布の拡大を抑える対策が求められています。

Q. 日本のコブハクチョウはいつどこで放されたの？

A. 戦前から飼育のために輸入されたことはあるようですが、まとまった数が野外に放鳥されたのは、1953年に皇居のお濠にドイツから輸入された24羽が放鳥されたのが初めてです。このコブハクチョウは、「ハクチョウをお濠に放つ会」から「財団法人皇居外苑保存協会」に寄贈され、同協会によって放鳥されたものです。また、茨城県の牛久沼で1963年に、北海道の大沼で1975年に放鳥された記録が残っています。

Q. そもそも何のために放されたの？

A. 観賞用の飼鳥として放鳥されました。もともとの分布域であるヨーロッパでは、当時より公園などにおいて半野生状態で飼育されていました。そのように人々に愛される様子を見た人たちが、日本でも同様の状況を実現しようとしたものと思われます。

Q. コブハクチョウは人に対してどんな問題を引き起こしているの？

A. 国内において現時点で最も大きな影響は農業被害だと思われます。ヨーロッパではコムギやアブラナへの採食被害が報告されており、手賀沼周辺をはじめ千葉県内の各地においても、イネの採食・踏み倒しの被害が報告されています。

手賀沼周辺では、餌を求めて遊歩道に上がってきた個体が糞をすることで、その清掃にコストがかかっていると考えられます。また、このように人との距離が近づくことで、鳥インフルエンザウイルスをはじめとする様々な感染症を媒介する高いリスクがあります。

繁殖期には巣やヒナを防衛するため、人間に対しても攻撃的になります。ハクチョウ類は翼に手瘤骨（しゅりゅうこつ）と呼ばれる尖った骨があり、この部位で叩かれると大人でもけがをします。ただし、繁殖期のコブハクチョウの巣やヒナには近づかず、距離をとっておけば必要以上に恐れる必要はありません。

Q. コブハクチョウがいることで、生態系にどんな影響があるの？

A. 環境省の「生態系被害防止外来種リスト」においては、在来種との競合や捕食が指摘されています。コブハクチョウは1日1.8-3.6kgほどの植物を食べるといわれています。加えて、根を食べるために掘り起こすときに周囲の植物質を破壊するので、水生植物群落に大きなダメージを与えることが知られています。水生植物群落の破壊は、沼の水質の悪化や魚をはじめとする多くの水生生物の生息の場を奪うことにつながり、水域全体の生態系への負の影響が懸念されます。

コブハクチョウは繁殖期になわばりに侵入した他種を排除するため、北アメリカでは在来種の繁殖鳥（ナキハクチョウ、ハシグロアビなど）に対する悪影響が懸念されています。また、アジサシ類のコロニーに群れが侵入して卵等を踏み潰し、放棄させた例も知られています。

Q. コブハクチョウに餌を与えてはいけないのはどうして？

A. 餌を与えることで、より多くのヒナを育てることができるようになり、冬期の生存率が高くなることが一般的に予想されます。そうすると、コブハクチョウの個体数が増え、現在発生している問題がより大きくなることが懸念されます。また、コブハクチョウと人の距離がより近くなることで、感染症を運んでしまうリスクが高くなります。

Q. コブハクチョウがこれ以上増えないようにするにはどうしたらいいの？

A. 一般の市民のみなさまは、コブハクチョウに餌を与えないことが重要です。かわいいから、きれいだからといって餌を与えることは、上記のような理由でコブハクチョウの数を増やしてしまうことにつながります。

行政機関は、個体数調整を積極的に行う必要があります。新たなハクチョウが生まれないように、繁殖を抑制する手法が試行的に各市町村によって行われています。卵を偽物（擬卵）と交換したり、様々な方法で卵の発生を停止させたりする方法が用いられています。

Q. 擬卵交換ってどういう対策方法なの？

A. 擬卵と交換しても、親鳥はしばらくの間抱卵を続けます。そのため、卵を取り除くことに比べ、再度場所を変えて繁殖をやり直すリスクを低くすることができます。この方法だと、新たにハクチョウを殺すことなく、個体数の増加を抑えることができます。しかし、ハクチョウは長生きなので、現在野外にいる成鳥の個体数はすぐに減るわけではありません。

Q. 農業被害で困っているのですが、親鳥やヒナを捕まえて田んぼから出してもいいですか？

A. コブハクチョウは外来生物ですが、鳥獣保護管理法の対象でもあります。そのため、一時的なものであっても、許可なく親鳥やヒナを捕獲することはできません。農業被害対策のために捕獲を行う必要がある場合は、各市町村の担当部署にご相談ください。

Q. 農業被害で困っているのですが、巣から卵を取り除いてもいいですか？

A. 成鳥やヒナと同様に、卵の移動や除去も鳥獣保護管理法で規制されており、許可なく行うことはできません。農業被害対策のために捕獲を行う必要がある場合は、各市町村の担当部署にご相談ください。

Q. 手賀沼のハスがなくなったのはコブハクチョウのせいなの？

A. 手賀沼下沼のハス群落は2020年春からほとんど見られなくなりました。その原因ははっきりわかっておらず、コブハクチョウの採食によるものかどうかは不明です。なお、ハスも手賀沼においては周辺の農地で栽培されていたものが逸出した外来種であり、船舶の航行障害や水質の悪化などを引き起こす侵略性のある種です。

Q. コブハクチョウへの標識調査は、何のためにやっているの？

A. 鳥に固有の番号の刻まれた足環などの標識を付ける研究の手法を「標識調査」といいます。1羽1羽を識別することで、寿命や移動などの基礎的な情報を調査できるほか、さまざまな生態の研究に用いられています。私たちは、手賀沼のコブハクチョウがどこに移動していくのか、手賀沼にどのくらいとどまっているのかを突き止めるために足環と首環の標識を実施しています。これらの調査から得られる情報は、個体数が増えて周辺に分散しているコブハクチョウに、今後どのように対処していくかを考えるうえで大変重要なデータになります。

Q. コブハクチョウに首環を付けて、悪影響はないの？

A. ハクチョウ類やガン類に首環を装着した標識調査は1950年代から行われており、鳥に対する影響の有無もよく調査されています。首環を付けることで採食行動に少し変化が起きた事例も観察されていますが、体重や繁殖成績には影響がなかったことが確認され

ています。今回行っている首環標識もこれまでと同様の方法で行われており、ハクチョウへの悪影響はほとんどないものと考えられます。

Q. かわいそうだから首環を外してもいいですか？

A. 標識を外してしまうと、上記の標識調査の目的が達せられなくなります。また、取り外しのために許可なくコブハクチョウを捕獲することは、それが一時的なものであったとしても鳥獣保護管理法に違反となり処罰されることとなります。標識調査に対してご意見のある方は、本 Q&A の最後に記載のある問い合わせ先にご連絡ください。

Q. 餌づけをすれば田んぼに出ていかないのだから、農業被害対策ができるのではないのでしょうか？

A. 確かに、一時的には餌づけ場所周辺の狭い範囲でイネへの被害を減らすことができるかもしれませんが。しかし、手賀沼周辺のコブハクチョウは、餌づけされている個体であっても広い範囲を移動し、他の地域に分散していくことが確かめられています。そのため、個体の移動を制御できない場合には、餌づけは個体数の増加と他地域への分散を促進してしまうおそれがあります。長期的にみれば、侵略的外来種であるコブハクチョウに餌づけを行うことには大きなリスクがあるため、被害対策のための餌づけは行うべきではありません。現在大規模に行われてしまっている給餌については、計画的にその量を減らしていく必要があります。

Q. コブハクチョウは悪くないのに、悪者扱いされてかわいそうじゃないですか？

A. すべての外来種は人の手によって持ち込まれたものですので、それによって生じる責任は人間にあり、コブハクチョウ自身に非はないというのは当然のことです。重要な問題は、人の手によって持ち込まれた生物が経済や生態系に悪影響を与える／与えるリスクがあるということで、この問題は人間の手によって解決する必要があると考えられます。

Q. 人間が意図的に放鳥したのに、今になって排除するのはおかしくないですか？

A. コブハクチョウが放鳥された 1950 年代には、人為的に持ち込まれた生物が生態系等に与える影響について、あまりよくわかっていませんでした。また、野生の鳥を保護するという意識は社会的には一般的ではなく、その普及啓発のためのシンボルとして、コブハクチョウを日本の野外に導入したのと考えられます。さらに、放鳥された地点から他の場所に分散していくことに関して十分に考慮されていなかったと考えられます。しかし、現在では、分布域外から人の手によって持ち込まれた生物が引き起こす様々な問題が明らかになっています。問題の解決のためには、現在の法令や判断基準に基づいて対策を進めることが重要であると考えられます。

Q. オオバンやオナガガモだって外国から飛んできている外来種じゃないですか？

A. 「人間の活動によって分布域の外に持ち込まれた生物」を外来種といいます。そのため、野生下において自らの力で日本に渡ってくるオオバンやオナガガモなどの渡り鳥は国外から渡来する場合でも外来種ではなく、在来種に区分されます。

Q. トキやコウノトリは外国から持ってきて放鳥しているのに、コブハクチョウだけを特別扱いするのはおかしくないですか？

A. トキやコウノトリは、もともと日本国内に繁殖個体群が分布していましたが、残念ながら国内の野生個体群は絶滅してしまいました。そのため、それぞれ中国産、ロシア産の個体を国内で繁殖され、野生への再導入が進められています。これらのことは、もともと日本に分布していなかったコブハクチョウとは大きく異なります。

Q. コブハクチョウは昔に野生の個体の記録があります。いま日本で増えているのも野生の鳥の可能性あるんじゃないですか？

A. ユーラシア大陸の日本海沿岸では越冬していることが近年わかっていますので、野生個体が越冬期に渡来している可能性は否定できません。しかし、国内で定着している個体群は由来が比較的是っきりしており、導入されるまではほとんど記録がなかったことを考慮すると、野生個体が国内で定着して繁殖している可能性は非常に低いと考えられます。なお、手賀沼で見られるコブハクチョウの多くは野生個体では頻度の低いポーリッシュ型であり、このことから野生個体由来ではない可能性が高いことが推測されます。

参考文献：

我孫子市 (2021) 手賀沼のハスが見当たりませんが、どうしたのでしょうか？ (オンライン) <https://www.city.abiko.chiba.jp/kurashi/faq/shizen/teganuma/hasu.html>, 参照 2022-7-21.

Animal and Plant Health Inspection Service (2012) Environmental assessment: Mute Swan damage management in Michigan. Animal and Plant Health Inspection Service, Riverdale Park.

Cramp S & Simmons KEL (eds) (1977) *Handbook of the Birds of Europe: The Middle East and North Africa. The Birds of the Western Palearctic. Vol 1. Ostrich to Ducks.* Oxford University Press, New York.

Eguchi K & Amano HE (2004) Invasive Birds in Japan. *Global Environmental Research* 8(1): 29-39.

Euring. Longevity list (online) <https://euring.org/data-and-codes/longevity-list>, accessed 2022-7-21.

- 環境省 (2015) 我が国の生態系等に被害を及ぼすおそれのある外来種リスト (生態系被害防止外来種リスト). 環境省, 東京.
- 国立環境研究所. 侵入生物データベース コブハクチョウ. (オンライン)
<https://www.nies.go.jp/biodiversity/invasive/DB/detail/20010.html> , 参照
2022-7-21.
- 皇居外苑保存協会 (1957) お濠の白鳥—コブハクチョウとその飼育—. 皇居外苑保存協会,
東京.
- Meng F, Chen L, Zhang B, Li C, Zhao G, Batbayar N, Natsagdorj T, Damba I, Liu S,
Wood KA, Cao L & Fox AD (2020) The migratory Mute Swan *Cygnus olor*
population in East Asia. *Wildfowl Special Issue 6*: 73–96.
- 小田谷嘉弥 (2019) 手賀沼のコブハクチョウの個体数変化と手賀沼からの分散例. あびこ
鳥だより (54): 2.
- 小田谷嘉弥 (2022) 手賀沼のコブハクチョウの個体数変化と手賀沼からの分散例 (続報).
あびこ鳥だより (61): 2-3.
- Reeber S (2015) *Waterfowls of North America, Europe & Asia. An Identification
Guide*. Princeton University Press, Princeton.
- 斉藤安行 (1995) 手賀沼におけるコブハクチョウ (*Cygnus olor*) の繁殖記録. 我孫子市鳥
の博物館調査研究報告 4: 65-68.
- Spray C & Bayes K (1992) The effect of neck collars on the behaviour, weight and
breeding success of Mute Swans *Cygnus olor*. *Wildfowl* 43: 49-57.
- 山階芳麿 (1952) 八丈島産コブハクチョウ. 山階鳥類研究所研究報告 1(1): 32.
- 吉安京子・森本 元・千田万里子・仲村 昇 (2020) 鳥類標識調査より得られた種別の生
存期間一覧. 山階鳥類学雑誌 52(1): 21-48.

本資料に関する問い合わせ先

コブハクチョウ標識調査グループ [kobuhakuring☆gmail.com](mailto:kobuhakuring@gmail.com)

(メール送信の際には☆を小文字の@に変えてください。)